

【メイド症候群】
実の娘でも性処理メイドなら愛し合っても問題ないよね♪
特典台本

	トラック01（プロローグ）
NC	「それでは続いてのニュースです」
NC	「昨年から日本でのみ流行している感染症、通称『メイド症候群』に新しい変異株が発見されたと発表がありました」
NC	「『メイド症候群』とは、思春期を迎えた女性、主に女子高生の間で流行している病であり、一度罹ると好意を抱く異性に対し、異常なほどの恋心が芽生え、一人の女としてご奉仕し、お仕えしたくなるという特異な病でしたが……」
NC	「今回発見された変異株は、父親に対し恋をしている少女を対象に感染し、メスとしての本能を強く刺激するようです」
NC	「政府はこの変異株を、その特性から『ファザコン型メイド症候群』と命名」
NC	「未だ特効薬は開発されておらず、病院での治療は困難な現状ではありますが、つい先日新たな治療法が発見されたとのことですよ」
NC	「その治療法とは、『ファザコン型メイド症候群』を発症した女性が、大好きな父親……すなわちパパの体液……とりわけ男性器に付着した精液の残りかす……所謂チンカスを体内に摂取するという方法ですよ」

「接種方法は主に、経口摂取、膣内接種、肛門接種の3パターンがあります」

「中でも女性器や肛門よる体液接種が最も効果的なよう推奨されています」

「調べによりますと、パパの唾液や尿、チンカス等を摂取した直後、女性は強烈な尿意に襲われ、尿を漏らしながらウイルスを排出するようです」

「つまり沢山体液を摂取し尿を出し続けることが最も効果的という事のようにです」

「皆様も、万が一『ファザコン型メイド症候群』を発症した場合は速やかに愛するパパから体液を注いで貰うようにしてください」

「それでは続いてのニュースに移ります……」

「……ふうん。『ファザコン型メイド症候群』ね」

「最近はある病気ばかり増えちゃって、一体この国はどうなっちゃうんだか」

「……栞の友達もこの前メイド症候群にかかったちゃって、今も朝から晩まで彼氏さんにご奉仕エッチし続けてるみたいだよ？」

栞

「本人は学校を休んでずっと彼氏とエッチできるから幸せって言ってたけど……あんな風に年中発情しちゃうなんてちよつと怖いよね……」

楓

「栞ってば人の心配してる場合じゃないんじゃない？」

楓

「この『ファザコン型メイド症候群』って文字通りパパ大好きっ子に感染するみたいだし、私達にとっても他人事じゃないと思うけど……」

栞

「ふえ？ そうかな？ だってこれって、パパの事が大好きすぎて発症しちゃう病気なんだよね？」

栞

「栞なんて、毎日パパのホッペにおはようのチュくをして、パパにあくくん♪ってしてあげて、パパと一緒に風呂に入って、パパと一緒に布団で寝てるだけだよ？」

栞

「このくらいなら他の女の子もしてると思うし、ファザコンって言う程じゃないんじゃないかな？」

栞

「ね？ パパもそう思うよね？ ん……ちゅ♪ ちゅ、ちゅ♪」

楓

「あ……うん……そうだね……栞がそう思うならそうなんだろうね……」

楓

「はあゝ……私も大概だとは思うけど、葉のパパ好きは間違いないく世界一だよ……本人は無自覚みたいだけど……」

葉

「んゝ、ちゅ♪ ちゅ♪ ちゅ♪ えへへゝ♪
パパゝ♪ パパからもゝ♪ んゝ………えへへゝ♪
パパのチュゝ嬉しい♪ ちゅ♪ んゝ……ちゅ♪」

楓

「って、ああゝゝ!! パパってば、今葉のホッペにちゅゝしたでしょ! もうゝ! ズルイよゝ!」

楓

「葉にしたなら私にもして? ね? ほらパパゝ………♪ んゝゝ………えへへ♪ やった♪
パパのキス嬉しい……♪ パパ………♪ パパ………♪ パパゝ………♪」

葉

「んゝ……ちゅ♪ って、そういえばお姉ちゃん、今日はまだ家族の挨拶してなかったよね?」

楓

「あ、そっか。パパの寝覚めが良かったから忘れてたね」

楓

「それならゝ……いつも通りゝ……♪」

葉

「葉とお姉ちゃんが朝のご挨拶してあげるね♪」

楓

「パパ……♪ おはよう……♪ ん……ちゅ♪
えへへ♪ 好き……♪ 大好き……♪ パパ
……♪ パパ……♪ パパ……♪ パパ……
♪」

栞

「パパ……♪ おはよう……♪ ん……ちゅ♪
えへへ♪ 好き……♪ 大好き……♪ パパ
……♪ パパ……♪ パパ……♪ パパ……
♪」

楓

「ん、ちゅ♪ はあ……パパ……♪ ん……
ちゅ♪ ちゅ、ちゅ♪ おはよう♪ パパ♪
ちゅ♪ ん……ちゅ♪」

栞

「パパ好き……♪ パパだ……い好き……♪ パ
パ……♪ パパ……♪ パパ……♪ パパ……
♪ ん……ちゅ♪ ちゅ……ちゅ♪」

楓

「えへへ♪ もうこの習慣も何年目だろう……
ん、ちゅ♪ れろれろ……ちゅ♪ ちゅ……
ちゅ♪」

栞

「ん、ちゅ♪ 栞がまだ小学生の頃にお遊びで初
めた事だけど……ちゅ♪ えへへ♪ パパの事
大好きだから……ちゅ♪ これからもずう……
としてあげるね♪」

楓

「ん♪ どんなに忙しくても、朝はパパのお耳に
チュッとしてあげないと、一日が始まった気が
しないから……ちゅ♪ ちゅ♪ ちゅ♪ ちゅ♪
♪」

栞

「パパ……♪ 好き……♪ 栞の大好きなパパ……
……♪ 栞の愛しいパパ……♪ ん……ちゅ♪
ちゅ……ちゅ♪」

楓

「ん……ちゅ♪ えへへ……♪ パパ♪ パ
パ♪ パパ♪ パパ……♪」

栞

「ん……ちゅ♪ えへへ……♪ パパ♪ パ
パ♪ パパ♪ パパ……♪」

楓

「パパ♪ 私達を大切に育ててくれてありがとう
♪」

栞

「栞達にいっぱい愛を注いでくれてありがとうね
♪」

楓

「パパだ～い好き♪ ん……ちゅ♪ ちゅ……
ちゅ♪」

栞

「パパだ～い好き♪ ん……ちゅ♪ ちゅ……
ちゅ♪」

楓

「……って、はえ……？ 何だろう……急に鼻が
ムズムズしてきて……うえ……ハ、ハ……ハク
ション……！」

栞

「ふえ？ お姉ちゃん？ どうしたの……？ っ
て、はえ……？ な、何で栞も……ハ、ハ……
ハクシヨン……！」

楓

「うう……どうしたんだろう……ん……はあ、
はあ……顔もお腹も熱くなって……息も……
はあ、はあ……はあ、はあ……♪」

栞

「うう……パパ……♪ 栞も変なの……♪
パパの事を見てるだけで胸がドキドキして、お
股がキュンキュンしちゃって……♪ 息も荒く
なっちゃって……♪ はあ、はあ……♪」

楓

「はあ、はあ……♪ ん、ごくっ……オナ
ニーしてる訳でもないのに……ダメ……止まら
ない……大好きなパパの前なのに発情止まんな
いってば……♪」

栞

「はあ、はあ……♪ うう……昨日パパの写真
でオナニーした時よりもおまんこ熱くって……
♪ はあ、はう……これって……もしかした
なくても……」

楓

「んあ……♪ はあ、はあ……♪ 『ファザコン
型メイド症候群』に罹っちゃったかもお……
♪」

栞

「んあ……♪ はあ、はあ……♪ 『ファザコン
型メイド症候群』に罹っちゃったかもお……
♪」

	トラック02
楓	「はあ、はあ……♪ ん♪ 簡易検査キットの結果が出たけど……予想通り……」
栞	「……うん……はあ、はあ……栞もお姉ちゃんも感染してたね……『ファザコン型メイド症候群』」
楓	「うう……まさか本当に感染しちゃうなんて思わなかったよ……今もパパの傍にいただけでドキドキしちゃうし……好きすぎて顔真っ赤だし……♪」
栞	「あう……ご奉仕したい……ご奉仕したい……ご奉仕したい……♪ 大好きなパパにいっぱいご奉仕してあげたいよお……♪」
楓	「私も……はあ、はあ……♪ パパにいっぱい喜んで欲しい……パパに幸せになって欲しい……私のご奉仕でいっぱい幸せになって欲しいの……♪」
楓	「んあ……♪ パパ……♪ パパ……♪ パパ……♪ パパ……♪」
栞	「あう……♪ パパ……♪ パパ……♪ パパ……♪ パパ……♪」

楓

「パパあ……辛いよお……苦しいよお……♪ パ
パにご奉仕出来ないなんて耐えられないよ……
……♪」

栞

「パパあ……このままだと栞、兎さんみたいに年
中発情しっぱなしで……はう……♪ お股濡
れて……ん♪ お気に入りの下着が汚れちゃう
……♪」

楓

「はあ、はあ……ん……パパあ……♪ お願い……
……♪ 大好きなパパにご奉仕させて……？ パ
パの体液……パパのチンカス……いっぱい飲ま
せて？」

栞

「メイド症候群を抑えるには大好きなパパの体液
……特にチンカスが一番って言われてるみたい
だし……」

栞

「栞がご奉仕してあげるから……栞のご奉仕でパ
パのお精子ぴゅっぴゅさせてあげるから……
ね？ お願い……♪ パパにご奉仕させて？
大好きなパパの事、愛させて？」

楓

「はあ、はあ……♪ 私も栞も、パパの娘だけど
……これは病気だもん……うん……そうだよ……
……♪ これは緊急事態なんだから……♪」

栞

「お姉ちゃんの言う通り……ん♪ はあ、はあ……
……♪ これは仕方ない事だもんね……♪」

楓

「そう……治療の為なら、娘に唾液を飲ませるの
だって……♪」

栞

「娘に汗を舐めさせるのだって……♪」

楓

「娘に耳カスごっくんさせるのだって……♪」

栞

「娘にチンカスごっくんさせるのだって……♪」

楓

「娘に中出しするのだって……♪」

栞

「娘のケツ穴を犯すのだって……♪」

楓

「パパが今までしたくてもできなかった事……
♪」

栞

「パパが栞達にしたかった事ぜゝんぶしていいん
だよ……？」

楓

「だって……これはエッチじゃなくて、病気の治
療なんだから♪」

栞

「だって……これはエッチじゃなくて、病気の治
療なんだもん♪」

楓

「だからね？ パパあ……♪」

栞

「お姉ちゃんと栞に……♪」

楓

「いっぱいご奉仕させて？」

「いっぱい」「奉仕させてね」

	トラック03
楓	「はあ、はあ……♪ えへへ♪ パパ……♪ お待たせ……♪ ん……♪ メイド服に着替えてきたよ……♪」
栞	「メイド症候群が流行った時、国から支給されたメイド服だけど……えへへ♪ まさか本当に使う日が来るとは思ってもみなかったね……♪」
楓	「ん……♪ メイド症候群って変な名前の病気って思ってたけど……当事者になってみるとこのネーミングも納得だよ……」
楓	「だって……さっきからもうず……つとパパに……奉仕したくてお股ウズウズしちゃってるもん……♪」
楓	「ん……今も、パパの香りだけで……す……ず……は……は……あ……あ……♪」
栞	「えへへ♪ どんな女の子もご奉仕メイドにしちゃう怖い病気だけど……栞はパパのメイドさんになれるなら大歓迎かな♪」
栞	「お姉ちゃん♪ せっかくメイドさんになれたんだもん……ね？」

楓

「ん……？ あはは♪ 確かにそういうオネダリ
はしてこなかったし、パパも新鮮な気持ちで楽
しんでくれるかも♪」

栞

「えへへ♪ それじゃあ〜」

楓

「せ〜……の♪」

楓

「私の治療の為に、沢山体液を頂戴させてもらう
ね♪ ご主人様♪ ん〜……ちゆ♪」

栞

「栞の治療の為に、沢山体液を頂戴させていただ
きますね♪ ご主人様♪ ん〜……ちゆ
♪」

楓

「んへへ……♪ 勢いに任せてパパとキスし
ちゃった♪」

栞

「あうあう〜♪ ついにパパとお口チュ〜し
ちゃったよ〜♪ ああ〜……♪ パパしゆき
〜♪ パパだ〜いしゆき〜♪ ん〜……ちゆ
♪ ちゆ♪ ちゆ♪」

楓

「パパは何もしなくていいからね？ 私達メイド
娘に全部任せて？ ご奉仕させて？」

楓

「ん〜……ちゆ♪ パパ〜♪ ご主人様〜♪
ん、ちゆ♪ ちゆ、ちゆ♪」

葉

「ちゅ♪ んゝ……葉のベロで唇ぺろぺろしてあげるね♪ んゝ……れゝゝろれろれろ……れろれろれろれろ♪ れろれろれろれろ♪ んゝ……ちゅ♪ ちゅ、ちゅ♪」

楓

「パパゝ……私も、パパの唇が渴かないようにペロペロしてあげる……♪」

楓

「んゝ……こんな風にお口の中で唾液をかき回してゝ……んゝ……くちゅくちゅくちゅくちゅ♪ くちゅくちゅくちゅくちゅ♪」

楓

「んゝ……れゝゝゝゝ……ろれろれろれろれろれろれろれろれろ♪ んゝ……ちゅ♪ ちゅ、ちゅ♪」

葉

「んれろれろれろれろ……れゝろれろれろ……れろれろれろれろ……♪ んれゝゝ……ろれろれろ……ちゅ♪ じゅるじゅる……♪ んれゝゝろれろれろれろ……♪」

楓

「んれろれろれろれろ……れゝろれろれろ……れろれろれろれろ……♪ んれゝゝ……ろれろれろ……ちゅ♪ じゅるじゅる……♪ んれゝゝろれろれろれろ……♪」

葉

「ん……あうゝ……♪ パパゝ♪ 葉の唇ご奉仕気持ちいい？」

葉

「んへへ♪ 本当？ あうう♪ 嬉しいな♪」

葉

「でもでも♪ 葉もパパの唾液味わいたいから
う……えへへ♪ パパ？ お口の中、失礼し
ちゃうね♪」

楓

「ん……やあ……私だってパパのお口の中れろ
ろするんだから！ ん……！」

葉

「ね？ パパ……お口あうんって開けて？」

楓

「ほら♪ パパ……お口あうんってして？」

葉

「はい♪ あううううう……んむれうう
うううううじゆる♪ じゆるるるうう
ううう♪ んちゅ♪ じゆるじゆるじゆる
る♪」

楓

「はい♪ あううううう……んむれうう
うううううじゆる♪ じゆるるるうう
ううう♪ んちゅ♪ じゆるじゆるじゆる
る♪」

葉

「あぶっ……れろれろ……んちゅ♪ じゆるじゆ
るじゆるじゆる……ん……ふあふあ……♪
あぶっ……じゆるじゆるじゆる……
る♪」

栞

「ふあふあのらえきおいひい……♪ ん……
もつろもつろ飲みたくなっひやう……♪ んれ
……ろれろれろ……じゆるる♪ じゆる
る……」

楓

「んちゅ♪ じゆるじゆる……んちゅ……♪ ん
……パパってば、朝ごはんの残りかしゅがま
ら残つれれ……んちゅ♪ れろれろ♪ じゆる
じゆるじゆるじゆる……♪」

楓

「ん♪ まかふえて♪ ご主人ひやまのお口お掃
除も、メイドのお仕事らから……ん……じゆ
るるる♪ ん♪ いっふあいご奉仕さしえて？
んれ……ろれろれろれろ……じゆるじゆ
るじゆるじゆる♪」

栞

「んぷ……じゆるる……♪ ん……♪ ふあ
ふあ……♪ ふあふあが大切に育ててくれたから
……栞、こんなにエッチに育ったんらよ……？
ん……ちゅ♪ れ……ろれろれろ♪」

栞

「ん……ほら……ベロもこんなに長くなつれ……
……唇もプルプルになつれ……♪ ん……れ……
……♪ じゆるる♪ じゆるじゆる……
……♪ じゆるじゆるじゆるう……」

栞

「んぶっ……♪ れんぶパパに喜んで欲しかった
から……んゝ……じゆるじゆる……♪ んゝ……
ふあふあゝ♪ 葉の唾液味わっへ♪ んちゅ
れろれろれろれろ♪」

楓

「んゝ……ふあふあのら液おいひい……♪　ん
ちゅ♪　れろれろ……んゝ……ちゅ♪　じゆる
るる♪　んぷっ……♪　んゝ……ちゅ♪
ちゅ、ちゅ♪　んちゅ♪　じゆるじゆるじゆる
じゆる♪」

葉

「んゝゝ♪ パパゝ……♪ パパの唾液、一度
ごつくんすりゅから……ん♪ お口から唾液吸
い尽くしちゃうね♪」

楓

「んゝ……パパも唾液をいっぱいベロに絡めて？
んへへ……♪ いふよゝ……♪」

栞

「んれゝゝゝゝゝゝ……じゅるるる♪
 じゅるるるるるる♪　じゅるるるるるるるゝゝ
 ゝゝゝゝゝゝゝゝ……んじゅるる……じゅぶ
 ぶ……んゝ……ぷはあ♪　はあ、はあ、はあ、
 はあゝ……♪」

楓

「んれゝゝゝゝゝゝ……じゅるるる♪
 じゅるるるるるる♪　じゅるるるるるるるゝゝ
 ゝゝゝゝゝゝゝゝ……んじゅるる……じゅぶ
 ぶ……んゝ……ぷはあ♪　はあ、はあ、はあ、
 はあゝ……♪」

楓

「うつぷ……♪ ん……しゅい……♪ らい
しゆきなパパの唾液でお口いっふあい……♪」

葉

「んへへ♪ ふあふあ♪ メイド娘の唾液
ごつくん♪ じつくり見へ……♪」

楓

「ふあふあ♪ いくよ……？」

葉

「ん……くちゆくちゆくちゆくちゅ♪ くちゆ
くちゆくちゆくちゅ♪ ん……く……♪
ごく……♪ ごく……♪ ごく……♪ ぷはあ
♪ はあ、はあ……♪」

楓

「ん……くちゆくちゆくちゆくちゅ♪ くちゆ
くちゆくちゆくちゅ♪ ん……く……♪
ごく……♪ ごく……♪ ごく……♪ ぷはあ
♪ はあ、はあ……♪」

葉

「ん……♪ パパ……♪ んれ……♪
……♪ ん♪ えへへ♪ パパから貰った唾
液、ぜ……んぶ飲んじやった……♪」

楓

「はあ、ん……♪ 何だろう……パパの唾液
ごつくんしてから……やあ♪ お股キュンキュ
ン来て……え……これって……もしかして……
……？」

葉

「う……あう……葉も……ん……この感じ……
ん……♪ パパ……ダメ……見ないで……やあ
……ダメ……♪」

栞

「パパの唾液飲んだ途端おしっここの穴ヒクヒクして……やあ……漏れちゃう……おしっこ漏れちゃうよ……」

楓

「やあ……パパ……パパ……パパ……パパあ……ダメ……トイレ間に合わない……おしっこ間に合わない……」

栞

「栞も出る……出ちゃう……♪ 大好きなパパの目の前でおしっこ出ちゃうよお……♪」

栞

「はあ、はあ……う……お姉ちゃん………」

楓

「んあ……♪ はあ、ん……栞い………」

栞

「う……♪ イク……♪ イク……♪ イクイクイクイクイクイク……♪ おしっこいきゅ……う……う……」

楓

「う……♪ イク……♪ イク……♪ イクイクイクイクイクイク……♪ おしっこいきゅ……う……う……」

栞

「んやあああああ……」

楓

「ふにや~~~~~」
♪♪

楓

「やあ……ダメえ……♪ パパ見ないで……！
この年でお漏らしなんて……う……恥
ずかしすぎて死んじゃうってば……」
……！

栞

「あ~~~~~♪ でもでもお……♪ お漏ら
し……それもパパの目の前で何て……それこそ
小学生以来で……ん~~~~♪ やあ~~~~~♪
恥ずかしいけどとっても気持ちいいよ~~~~
……♪」

栞

「はあ、ん♪ パパ~~~~♪ いっぱい見て？ 栞の
ご奉仕お漏らし沢山見て？ 匂いもいっぱい嗅
いで？ 栞のおしっこいっぱい感じて~~~~
♪」

楓

「ん……やあ……♪ パパあ……♪ う……好
きい……♪ パパ大好きい……♪ ん……お
しっこしながらの告白気持ちよすぎ~~~~♪」

楓

「ああ……♪ パパ……♪ パパ……♪ パパ……
……♪ パパ……♪ パパ……♪ パパ……♪
……♪」

栞

「やあ……♪ パパ……♪ パパ……♪ パパ……
……♪ パパ……♪ パパ……♪ パパ……♪
……♪」

楓

「んゝ……はふうゝゝ……やっと……ん♪ おしっこ収まってきた……」

栞

「えへへ……♪ ん……♪ 何だかおしっこしたからか、ちょっとだけお腹のムズムズが治まってきた気がするね」

楓

「あ、もしかしてそういう事？ パパの体液を摂取しておしっこ出せば病原菌も一緒に出て行くみたいなの……？」

栞

「あ♪ きつとそうだよ♪ 風邪ひいたときはいっぱいお水飲んでトイレに行くのは基本だもん！」

栞

「今みたいにパパの体液ごっくんして、その度におしっこし続けられればきつとすぐ良くなるよね♪」

楓

「うゝ……でも……少し良くなったとはいえ、まだ体は火照ってるし、パパへのご奉仕欲も止まらないし……」

楓

「こんなの続けてたら部屋中おしっこ塗れで、大好きなパパに迷惑かけちゃう……」

楓

「……って、ひゃん！？」

栞

「……って、きやう♪♪」

楓

「うゝ……パパ……？ そんな抱きしめたらパパの服おしっこで汚れちゃうってば……！ っ
て、わわ……！？ ふえ！？ パパのズボン……
すっごく膨らんでる……！」

栞

「あうゝ……娘のお漏らしで興奮しちゃうだなんて……えへへ♪ パパってば、ちよつと変態さんみたいだよ……？」

楓

「って……やっ……パパ……ダメ……また唾液飲まされたらおしっこ漏れちゃ……んあぶっ……」

楓

「ん……ちゅ♪ じゅるる……♪ んちゅ♪ れろれろ……ん……パパ……♪ パパ……パパ……♪」

楓

「んちゅ♪ ちゅ……ん、ん……で、でりゅ……ちゅ♪ じゅるじゅる……んむう……おしっこ出ちゃう……おしっこ……おしっこ……♪
ん、ん……！」

楓

「んむう……じゅるる……！ ん……！ じゅるじゅる……じゅるる……んむう……
……！ ちゅ♪ れろ……ちゅ♪ んちゅ……れろれろ……♪ ちゅ……♪ ちゅ……ちゅ♪ れろれろ……♪ んちゅ♪ ん……ちゅ♪
ちゅ、ちゅ♪」

葉

「わあ〜……♪ お姉ちゃん、おしっこ漏らしながらキスしちゃって……あう〜……♪ 羨ましいよ〜……♪ 葉もまたおしっこお漏らししたいよ〜♪」

楓

「ん、んむう〜……ぷはあ！ はあ、はあ……♪
もう……パパってば強引なんだからあ……
♪」

楓

「ふえ……！？ べ、別に嫌だなんて言っていないでしょ……！？ むしろパパに愛されながらお漏らしするの気持ちいいし……それに、今の私はパパの……ご主人様のメイドだし……♪」

楓

「パパがしたいなら……メイドに拒否権なんてないんだから……♪ もし娘のおしっこが見たいならいつでも言ってみて？ パパのお願いなら……全部叶えてあげる……♪」

葉

「パパパパ！ 葉もお姉ちゃんと一緒だよ？ パパがして欲しい事なら葉、何でもシテあげるもん♪」

葉

「エッチなキスも、おしっこ見せるのも、おっぱいを見せるのも……おまんこを見せるのも……
♪」

葉

「どんな些細な事でも命令して？ 今の葉は、パパに……ご主人様に命令されのが一番嬉しいの……♪」

楓

楓

栞

楓

栞

「ん……♪ 伊達にメイド症候群だなんて呼ばれてないね……♪ さっきからずっとパパに命令して欲しい……♪ パパにご奉仕させて欲しいって気持ちが出まらないし……♪」

「だからね？ パパ……♪」

「だからね？ パパ……♪」

「メイドの娘達に、いっぱいエッチな命令してよね♪」

「メイドの栞達に、いっぱいエッチな命令してね♪」

	トラック04
楓	「パパ……♪ すう……ふう…… ……♪ ふう……♪ ふう…… ……♪」
栞	「パパ……♪ すう……ふう…… ……♪ ふう……♪ ふう…… ……♪」
楓	「ふ……ん♪ パパってば……♪ 唾液でベト ベトのお口で耳舐めして欲しいだなんて…… 娘に対してこんな変態願望があったんだ♪」
栞	「パパってばとっても可愛い♪ 安心して？ 栞 が丁寧に、れろれろ……ってお耳ぺロぺロしてあ げるね♪」
楓	「それじゃあ、ご主人様♪ お耳、失礼しちゃう ね……♪ んれ……ろれろれろ れろれろ♪」
栞	「それでは、ご主人様♪ お耳、失礼しますね…… ……♪ んれ……ろれろれろ れろ♪」
楓	「んれ……ろれろれろ……ちゅ♪ ん……ちゅ ……♪ えへへ♪ パパ……♪ ろう？ 娘にお 耳れろれろされる気分は♪ んれ……ろれ ろれろ♪」

栞

「ちゅ♪　じゅるじゅる……ん……ちゅ♪　小さい頃はパパに膝枕されながらお耳掃除してもらったから……ん……ちゅ♪　ちゅ、ちゅ♪」

栞

「今度は栞がパパのお耳、綺麗にしてあげる♪　うん♪　パパへの恩返しご奉仕だよ♪　んれ……ろれろれろれろれろ♪」

楓

「ん……ちゅ♪　じゅるじゅるじゅるじゅる……んれ……ろれろれろ……ん、ぷはあ♪　はあ、はあ……♪」

楓

「うう……パパの耳、こんなに耳カスが堪っちゃって……んもう……パパ？　ずっと耳掃除サボってたでしょ？」

楓

「私達には綺麗にしろって言う癖に自分はサボってるだなんて……そんなイケナイパパにはお仕置きが必要かな……？」

楓

「例えば……お耳ペロペロされながら……こ……♪」

楓

「娘のご奉仕で勃起しちゃったパパのダメダメおちんぽ♪　虐めちゃうんだから♪」

栞

「ん……やあ……お姉ちゃんばっかりズルイよお……パパ……♪ 栞も……♪ 大好きなパパのおちんぽ♪ ずうくと触って、弄って、気持ちよくしてあげたかったの♪」

栞

「だからね……？ 栞もお姉ちゃんと一緒に……大好きなパパのおちんぽにご奉仕させてほしいな♪」

楓

「ん……♪ それじゃあ栞？」

栞

「うん♪ お姉ちゃん……♪」

楓

「せ……の♪ パパのおちんぽ出しちゃえ……♪」

栞

「せ……の♪ パパのおちんぽ出てきちゃえ……♪」

楓

「わ……♪ パパのおちんぽ格好いい……♪」

栞

「や……♪ パパのおちんぽ可愛い……♪」

楓

「……って、栞……？ パパの立派なおちんぽはどこからどう見ても可愛いより格好いい寄りでしょう？」

栞

「ええ〜？ お姉ちゃんよく見てよく！ パパのおちんぽってば、こんなに大きくて逞しいのに、先っぽは皮で隠れちゃってる恥ずかしがり屋おちんぽなんだよ？」

栞

「大人になっても子供の頃と変わらない、綺麗で恥ずかしがり屋な包茎おちんぽ……♪ あうあう……♪ こんな可愛すぎて栞、お股キyunkyunしてお漏らししちゃうよ〜♪」

楓

「ええ〜……パパだっておちんぽ可愛いって言われるより格好いいって言われる方が嬉しいでしょう？」

栞

「違うよね？ パパはおちんぽ可愛いって言われた方が嬉しいよね？ ね？ ね？」

楓

「は〜……もう、パパってば優柔不断なんだから〜……」

栞

「えへへ♪ それなら間を取って、パパのおちんぽは『格好可愛いおちんぽ』だね♪」

楓

「ん……じゃあその格好可愛いおちんぽを、私と栞で〜……」

楓

「耳舐めしながら、シコシコぴゅっぴゅ♪ してあげる♪ んれ〜〜ろれろれろれろ……♪」

葉

「耳舐めしながら、シコシコぴゅっぴゅ♪ してあげるね♪ んれゝゝろれろれろれろれろ…♪」

楓

「れろれろ…んゝ…パパゝ…♪ 包茎の皮を上下に動かしながら…おちんぽシコシコ♪ おちんぽシコシコ♪ おちんぽシコシコ♪ おちんぽシコシコ♪」

楓

「えへへ♪ どう？ んゝ…ちゅ♪ じゅるじゅる…ちゅ♪ おちんぽ何て初めて触るけど、上手くご奉仕出来てる？ チン皮手コキ、気持ちよくなってくれてる？ んれゝゝろれろれろ♪」

葉

「れろれろれろ…んゝ…ちゅ♪ ねえパパゝ？ 知ってた？ 葉とお姉ちゃんね？ つか絶対にパパのお嫁さんになって、パパといっぱいエッチするって決めててね？」

葉

「パパが忙しくてお家にいない日にね？ お姉ちゃんとエッチなおもちやでエッチの練習してたんだよ？」

葉

「ローションの代わりに唾液をたらゝって垂らして…こう…おちんぽシコシコ♪ おちんぽシコシコゝゝ♪ おちんぽじゅぽじゅぽ♪ おちんぽじゅぽじゅぽゝって♪」

楓

「ん……やあ……栞ってば何バラして……ってパパ……？ 違うからね……？ 別にパパの為に訳じゃなくって……いつかパパみたいな素敵な人と出会った時の練習ってだけで……ん、れろれろ……ちゅ……♪」

栞

「んもう……♪ お姉ちゃんってばそんな事言っちゃって……♪ さっきまであんなにパパ好き好き……って告白してたのに今更恥ずかしがっちゃって……♪ ん……ちゅ♪ れろれろ……ちゅ♪ ちゅ♪」

栞

「それに……♪ パパ以上に素敵な人なんている訳ないのにね……♪ んれ……ろれろれろ♪」

楓

「う……もう！ お姉ちゃんを虐める妹なんて知らない……！ パパ？ 栞の事何て無視して、私のご奉仕に集中して？」

楓

「ほら……♪ こうやってベロに唾液を絡ませて……ん……くちゅくちゅくちゅくちゅ……♪ くちゅくちゅくちゅくちゅ……♪」

楓

「ん……パパ……♪ んれ……♪
じゅる♪ じゅるる♪ じゅるるるるう……♪
……♪ んれろ♪ れろれろれろれろ♪
れろれろれろれろ♪」

栞

「えへへ♪ 照れ隠ししちゃうお姉ちゃんも可愛い♪ ん……ちゅ♪ ちゅ、ちゅ♪」

葉

「それに♪ パパもこゝこ♪ おちんぽ♪ チン皮の中でピクピク震えちゃって♪ お姉ちゃんのをれろろご奉仕で感じてくれてるんだね♪」

葉

「うん♪ いいよ♪ 葉もシテあげる♪ パパの為にいっぱい練習した葉のれろろご奉仕♪ 耳カスぜゝんぶ舐め取っちゃうくらい頑張っちゃうもん♪」

葉

「ん……パパ……♪ 葉の唾液の香り、お耳で感じて……？ んれ……ろれろれろれろれろ……♪ じゆるじゆる♪ れろれろれろれろ……♪」

楓

「れろれろれろれろ……じゆるる……♪ ん……パパあ……♪ ん……じゆるじゆるじゆるじゆる♪」

楓

「ん……おちんぽからトプトプ我慢汁溢れてきてる……♪ パパのエッチ……♪ 変態……♪ ん……ちゅ♪ れろれろれろれろ……♪」

楓

「ん……いいよ……？ この我慢汁を使って……んしょ……♪ チン皮の中に溜まったチンカス……♪ 指でくちゅくちゅ洗ってあげる♪」

楓

「ほくら♪ パパの包茎に指を入れて……♪ チンカスクちゅくちゅ♪ チンカスクちゅくちゅ……♪」

楓

「パパ……♪ もっと可愛く喘いで？ チンカス
くちゆくちゆされていっぱい感じて……？ ほ
ら♪ チンカスくちゆくちゆ♪ チンカスく
ちゆくちゆ♪ んれ……ろれろれろ
れろ……♪」

葉

「ちゆ♪ じゆるじゆる……ん……ふあふあ
……♪ ん、ちゆ♪ ちゆ、ちゆ♪ 葉もチ
ンカスイじいじしてあげるね♪」

葉

「ほら♪ パパの包茎の皮をちよこつと剥いて
……はあ……♪ パパの美味しそうなチンカ
スう……♪ 葉の指で掬い取って……♪」

葉

「大好きなパパのチンカスを……葉の指に塗り
込んじゃう♪ それ♪ チンカスぬりぬり♪
チンカスぬりぬり♪」

葉

「やあん♪ パパのチンカス白く泡立ってきた
よ？ わあ♪ 包茎がチンカスジャグジーで
いっぱいだね♪ この調子で……チンカス
くちゆくちゆ♪ チンカスくちゆくちゆ♪
んれ……ろれろれろれろ……♪」

楓

「んれ……ろれろれろ……じゆるる……ん……
パパ♪ チンカスくちゆくちゆ♪ チンカス
くちゆくちゆ……♪」

楓

「あはは♪ 娘の指をチンカス臭くするなんて、
パパってばイケナイご主人様なんだ♪ んれ
ゝゝろれろれろ……♪」

葉

「れろれろ……ちゅ♪ パパ……♪ 葉も……
……♪ チンカスくちゅくちゅ♪ チンカスく
ちゅくちゅ♪ チンカスくちゅくちゅ♪ チン
カスくちゅくちゅ♪」

葉

「このまま……チンカスで汚れた葉のお手々で
……おちんぽシコシコ♪ おちんぽシコシコ
……♪ んれゝゝろれろれろれろれろれろ♪」

楓

「ん……はあ、はあ……♪ やあ……♪ パパ……
♪ お願い♪ 早くおちんぽぴゅっぴゅして……
……? じゃないともう……♪ ん、やあ……♪
……♪ どんどん発情強くなってきて……ん……れゝ
ゝろれろれろ……♪」

葉

「んちゅ♪ じゅるじゅる……ん、やあ……♪
……♪ パパ……♪ 葉も……♪ さつきからね?
……♪ パパのチンカスと耳カスの匂いにあてられて……
……♪ ん、あん♪」

葉

「はあ、はあ……♪ もうダメなの……♪ 早く
……♪ パパの体液……♪ パパのおちんぽミルク飲まない
……♪ と……♪ 葉おかしくなっちゃうの……♪ 葉……
……♪ パパのメスになっちゃうのお……♪」

楓

「んちゅ♪ じゅるじゅるじゅるじゅる……ん
……やあ……♪ パパ好き……♪ パパだ
い好き……♪ ん……ちゅ♪ れろれろ…
…ん……パパ……♪ パパ♪ パパ♪ パ
パ♪ パパ……♪」

栞

「れろれろ……んちゅ♪ じゅるる……♪ パ
パしゅきい……♪ パパら……いしゅき……
♪ パパ……♪ パパ……♪ パパ……♪ パ
パあ……♪」

楓

「ん……れ……ろれろれろれろれろれ
ろれろ……じゅるる……じゅるるる……じゅ
るるるるる……ん……ぶはあ♪
はあ、はあ……♪」

栞

「ん……れ……ろれろれろれろれろれ
ろれろ……じゅるる……じゅるるる……じゅ
るるるるる……ん……ぶはあ♪
はあ、はあ……♪」

楓

「あう……♪ パパ好き……♪ パパ好き…
…♪ パパのおちんぽ大好き……♪ パパの耳
カス大好き……♪ パパのチンカスだ……好き
……♪」

栞

「えへへ……♪ パパ好き……♪ パパ大好き……♪ パパのおちんぽ大好き……♪ パパの耳カス大好き……♪ パパのチンカスだ〜い好き……♪」

楓

「パパ……♪ 好き♪ 好き♪ 好き♪ 好き♪ 好き♪ 好き♪ 好き♪ 好き♪ 好き♪ 好き♪」

栞

「パパ……♪ 好き♪ 好き♪ 好き♪ 好き♪ 好き♪ 好き♪ 好き♪ 好き♪ 好き♪ 好き♪」

楓

「好き好き好き好き好き好き好き好き好き」

栞

「好き好き好き好き好き好き好き好き好き」

楓

「パパ……♪ イって♪ イって♪ イって♪ イって♪ イって♪」

栞

「パパ……♪ イって♪ イって♪ イって♪ イって♪ イって♪」

楓

「ほらほら♪ おちんぽぴゅっぴゅ♪ おちんぽぴゅっぴゅ♪ おちんぽぴゅっぴゅ♪ おちんぽぴゅっぴゅ♪ おちんぽぴゅっぴゅ♪」

栞

「それぞれ♪ おちんぽぴゅっぴゅ♪ おちんぽぴゅっぴゅ♪ おちんぽぴゅっぴゅ♪ おちんぽぴゅっぴゅ♪」

楓

「ん、やあああああ……♪」

栞

楓

栞

栞

栞

楓

栞

楓

栞

「ん、きゃあああああん~~~~♪」

「うわうわ……！ パパ……！？ え、ちょっとこれ凄……っ……！？ ん、あうっ……！ パのおちんぽからぴゅぴゅぴゅ~~~~って白いの出てるよお……！？」

「わ~わ~♪ パパ~♪ 嬉しいな~嬉しいな~♪ 栞のチンカスクちゅくちゅでこんなにおちんぽ喜んでくれたんだね♪」

「うん♪ いいよ~♪ もっと出して？ パパのチンカスおちんぽミルク、栞のお手々に全部ぴゅっぴゅして？」

「ほらほら♪ ぴゅっぴゅ♪ ぴゅっぴゅ♪
ぴゅっぴゅ♪ ぴゅっぴゅ♪」

「私も……ぴゅっぴゅ♪ ぴゅっぴゅ♪ ぴゅっ
ぴゅ♪ ぴゅっぴゅ♪」

「ぴゅっぴゅ♪ ぴゅっぴゅ♪ ぴゅっぴゅ♪
ぴゅっぴゅ~~~~……♪」

「ぴゅっぴゅ♪ ぴゅっぴゅ♪ ぴゅっぴゅ♪
ぴゅっぴゅ~~~~……♪」

「はあ~い♪ パパ~♪ おちんぽぴゅっぴゅお
疲れ様でした♪」

楓

「うわゝ……手がパパので真っ白……ん……そっ
か……これが男の人の……パパの精液なんだ……
……♪」

楓

「……スン……スンスン……すう……すう……
……はあ……はあ……はあ……はあ……
……♪」

楓

「ああ……♪ やあ……♪ パパの精液……
♪ パパのチンカスおちんぽミルク……♪ 凄
くオス臭くてエッチな香り……♪ ん……すう
……はあ……はあ……はあ……はあ……すう……
はあ……♪」

葉

「ん……はあ、はあ……これを飲んでおしっこす
れば……少しは発情も収まるんだよね……？」

葉

「それじゃあパパ……♪ パパの出したてチンカ
スおちんぽミルク……いただいちゃうね♪」

楓

「じゃあパパ……♪ パパの出したてチンカスお
ちんぽミルク……いただくね……♪」

葉

「ん……れろ……♪ じゅる……じゅるじゅる……
……じゅるるる……じゅるるるるる……
……♪」

楓

「ん……れろ……♪ じゅる……じゅるじゅる……
……じゅるるる……じゅるるるるる……
……♪」

楓

「んやあ……♪ おしっこ出る……♪ おしっこ
出るう……♪ おしっこイク♪ おしっこイク
イクう……♪」

栞

「んやあ……♪ おしっこ出る……♪ おしっこ
出るう……♪ おしっこイク♪ おしっこイク
イクう……♪」

楓

「んやあああああ……♪」

栞

「きやあああああ……♪」

楓

「やあ……♪ パパ……♪ ダメ……♪ 聴
いちやダメ……♪ ん……おしっこ聴いちや
嫌あ……♪」

栞

「パパ……♪ もっと聴いて……♪ 栞のお
しっこ♪ パパの事が大好きな栞のおしっこ
いっぱい聴いて……♪」

楓

「う……ダメだってば……！ 聞き耳立て
ちやダメ……って、ひうつ……！ やあ……止
まんない……おしっこ止まんない……♪」

楓

「う……♪ パパ……♪ パパ……♪ パ
パ……♪ パパ……♪ パパあ……♪」

栞

「やあ……♪ パパ……♪ パパ……♪ パ
パ……♪ パパ……♪ パパあ……♪」

楓

「んゝゝ……♪ はあ、はふゝゝゝ……♪
やっとおしっこ止まったゝ……」

栞

「えへへ♪ パパ、いっぱいおしっこ見てくれて
ありがとうね♪ んゝ……ちゅ♪」

楓

「うゝ……おしっここのせいでパンツがビチョビ
チョで気持ち悪いし……パパもおちんぽ精液塗れ
だし……」

楓

「ねえパパ……？ こんな汚れたおちんぽじゃお
部屋も汚れちゃうし……精液がチン皮に溜まっ
たらまたチンカスが出来ちゃうよね……？」

楓

「それならさ……今の私はパパのメイドで……ご
主人様の命令には逆らえないんだし……だから
そのう……ね……？」

栞

「えへへ♪ パパゝ♪ お姉ちゃんの言う通りだ
よ？ 眼の前には汚れたおちんぽと可愛くてご
奉仕したがりのメイド娘が～人♪」

栞

「こんな状況なら……ご主人様がすべき事は二つ
だけだよね♪」

楓

「ん……パパお願い……♪ パパの汚れたチンカ
スおちんぽ……私のお口で綺麗にしろって命令
して……？」

葉

「ん……パパお願い……♪ パパの汚れたチンカ
スおちんぽ……葉のお口で綺麗にしろって命令
して……？」

	トラック05
楓	「はあ、はあ……わあ……これがパパのおちんぽなんだ……ん……く……」 凄く男らしいのに、先っぽはチン皮の中に隠れちゃって……はあ……ほんと素敵なおちんぽ……」
葉	「えへへ♪ パパってば娘におちんぽ見られて恥ずかしいんだね♪ でも……今から葉のお口でれろろろってご奉仕してあげるんだから、いつまでもチン皮に隠れてちゃダメだよ？」
楓	「ん……葉の言う通り、パパのおちんぽ綺麗にしてあげなきゃだし、残った精液も、オス臭いチンカスも……全部大切なお薬なんだから……」
葉	「ここは責任をもって、パパのメイドである葉とお姉ちゃんのお口で♪」
楓	「れろろ舐めて綺麗にしてあげる……」
葉	「それじゃあまず……」
楓	「おちんぽを隠しちゃってる可愛いチン皮を……」
葉	「そ……れ♪ チン皮むきむき…… 包茎むきむき……」
楓	「そ……れ♪ チン皮むきむき…… 包茎むきむき……」

栞

「わあ~~~~~♪ パパの包茎おちんぽむきむき
しちゃった~~~~♪」

楓

「はあ、はあ……♪ ああ……♪ パパの生おち
んぽ……♪ パパの勃起おちんぽ……♪ ん
~~~~す~~~~はあ~~~~  
~~~~♪」

楓

「パパ好き……♪ パパのチンカスおちんぽ大好
き……♪ ん……♪ きつとこのチンカスも美
味しいんだよね……？」

栞

「当然だよ♪ だってパパのチンカスだもん♪
栞とお姉ちゃんだけが食べられるご馳走だもん
♪」

楓

「ん……パパ……私達の為にチンカスいっぱい
作ってくれてありがとう……♪ パパの……ご
主人様のチンカス……いただいちゃうね……
……？」

栞

「栞も栞も~~~~♪ パパ~~~~♪」

楓

「パパのくっさいチンカス……いただきま~~~~
~~~~♪ んれ~~~~ろれろれろ~~~~  
~~~~♪」

栞

「パパのくさ~いチンカス……いただきま~~~~
~~~~♪ んれ~~~~ろれろれろ~~~~  
~~~~♪」

楓

「んれろれろれろ……じゆるる……ん……
パパのおちんぽ……ん……じゆるじゆる……
……これがふあふあのチンカスの味い……♪ ん
ちゅ♪ じゆるじゆるじゆるじゆる……♪」

葉

「んちゅ♪ じゆるじゆる……♪ ん……んふ
ふ……♪ ふあふあ……？ ろうかな……？ 葉
のおひんぽれろれろ……気持ちいいかな……？
んれ……ろれろれろれろ……♪」

楓

「ん……ちゅ♪ ちゅ、ちゅ♪ んへへ……パ
パってば、おちんぽの先っぽに……ん……
ちゅ♪ ってされるの好きなんだ……♪ ん……
……ちゅ♪ ちゅ、ちゅ♪」

葉

「ん……れろれろれろ……ん、お姉ちゃ
ん？ パパはチュってされるよりもこうやって
……んれ……ろれろれろれろれろれろれろ
れろれろれろ……♪」

葉

「つていう風にベロでれろれろ舐めてあげた方が
気持ちいいんだよ？ んれ……ろれろれろれ
ろれろ♪ んれ……ろれろれろれろれろれろれ
ろれろ……♪ じゆるる♪ ん……
ちゅ♪」

楓

「ん……ちゅ♪ ちゅ、ちゅ、ちゅ、ちゅ♪
ん、パパ？ 違うよね……？ パパはおちんぽ
ちゅっちゅされる方が好きだもんね？」

栞

「んゝ……れろれろれろ……じゆるるるゝ
ゝゝ……んゝ……ぷはあ！ はあ、はあ……
むうゝ……パパ？ パパは栞みたいな可愛い子
にれろれろゝゝゝってされる方が好きだもん
ね？」

楓

「むうゝ……栞ってば嘘ばかりついてゝ！ そ
んなに言うならパパのおちんぽに直接聞いてみ
ようよ！」

栞

「うん、いいよ！ パパのおちんぽの事なら栞が
一番分かるもん！ パパは絶対ベロでれろれろ
される方が好きだもん！」

楓

「む！ じゃあまずはおちんぽちゅっちゅから…
……！」

楓

「せゝゝゝの……！ んゝ……ちゅ♪ ちゅ、
ちゅ、ちゅ、ちゅ♪ れろちゅ♪ ちゅ♪
ちゅうゝ……ちゅ♪ ちゅ♪ ちゅ♪ んゝ
……ちゅ♪ れろぷちゅ……♪ ちゅ……ちゅ
♪」

栞

「せゝゝゝの……♪ んゝ……ちゅ♪ ちゅ、
ちゅ、ちゅ、ちゅ♪ れろちゅ♪ ちゅ♪
ちゅうゝ……ちゅ♪ ちゅ♪ ちゅ♪ んゝ
……ちゅ♪ れろぷちゅ……♪ ちゅ……ちゅ
♪」

楓

「はあ……おちんぼ……ちゅっちゅ♪ おちんぼ
……ちゅっちゅ♪ ん……ちゅ♪ ちゅ……
ちゅ♪」

楓

「パパ……♪ ここ……♪ おしっこの穴にも
……ん……ちゅ♪ 柔らかい唇押し付けて
あげる……♪」

楓

「ん……ちゅ♪ ちゅぶっ……ちゅ♪ ちゅう
……ちゅ……ちゅ♪ んぶっ……ちゅ♪ れ
ろ……ちゅ♪ ん……ちゅ♪ ちゅ、ちゅ
♪」

葉

「やあ……パパ……♪ 葉はね……？ こゝ
こ♪ パパの剥きたておちんぼの敏感な力リ
ちゃんに……ん……ちゅ♪ ちゅ♪ ちゅ
♪」

葉

「れる……ちゅ♪ ん……ちゅ♪ えへへ♪
チン皮に隠れてるチンカスちゃんにも……ん
……ちゅ♪ れろ、ちゅ♪ ちゅ……ちゅ
♪」

楓

「んちゅ♪ ちゅ、ちゅ♪ あは♪ パパ？
おしっこの穴から我慢汁出てきたよ？ ちゅ♪
ん……ちゅ、ちゅ♪」

楓

「やっぱりおちんぼにキスされる方が好きなんだ
……♪ パパの……変態ご主人様♪ ん……
ちゅ♪」

楓

「んゝ……ふあふあゝ……♪ んちゅ♪ じゆる
じゆる、れろれろれろれろ♪ ん♪ ふあふあ
のちんかしゅれべ口真っ白……んちゅ♪ れろ
れろれろれろ……♪」

楓

「ん？ んへへ♪ らいじょうぶらよ？ 美味し
くなかったらこんな一生懸命れろれろする訳
ないじゃない……んちゅ♪ れろれろ……♪」

楓

「ん、らって、私はパパの娘らもん……♪ ん
ちゅ♪ じゆるじゆる……らからパパの体から
出る物は全部ご馳走なの……んちゅ♪ れろれ
ろ……♪」

栞

「ん、栞もゝ……じゆるじゆるじゆるじゆる……
ん♪ 病気の治療ってだけでこんなに頑張った
りしないよ？」

栞

「これも全部パパの事が大しゆきから……♪
れろれろ……♪ 大好きなパパにご奉仕したい
から……こうやってお口を開けてゝ……れゝゝ
ゝゝゝゝろれろれろれろれろ♪」

栞

「れろれろ……んゝ……ちゅ♪ んへへ♪ パパ
見れゝ？ んゝ……れゝゝゝゝゝゝ♪」

栞

「栞のベロパパのチンカシュで真っ白れしよゝ♪
んへへゝ♪ この勢いのままゝ……もゝつろ
チンカス舐め取っちゃうね♪」

葉

「れろれろ……♪ ん♪ パパには毎晩、寝る前におちんぽぴゅっぴゅしてもらって、包茎の中で一晩精液を蒸らして、朝には新鮮なチンカスの出来上がり♪」

楓

「本当ならずと前からパパとこういう事したかった……大好きなパパのおちんぽ毎日味わいたかった……んちゅ♪ れろれろ……♪」

葉

「れろれろ……でもやっぱパパはパパで、葉はパパの娘だから……そういうのはパパに迷惑かなって思っでずっど我慢してきたんだよ？ んれろれろれろ……♪」

楓

「ん……ちゅ♪ でも今は病気の治療っていう言い訳が出来るし……パパと娘でも……治療の為ならパパのおちんぽれろれろしても自然な事だから♪ れろれろ♪」

葉

「だからパパもイっへ？ ん……じゆるじゆるじゆるじゆる……♪ 葉のれろれろご奉仕でイっへ？ 気持ちいいおちんぽぴゅっぴゅしへ？ んれろれろれろ♪ じゆるじゆるじゆるじゆる♪」

楓

「ん……ちゅ♪ じゆるじゆるじゆるじゆる……れろれろれろれろ……♪ んふふ♪ パパの為に……ラストスパートはお口全体れ……んあ……むう……!!」

楓

「んゝ……じゆるじゆるじゆるじゆる♪ じゆるるるる♪ じゆるるるるゝゝゝゝ♪」

楓

「んゝ♪ んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん♪
んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん♪ んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん♪
んぶんぶんぶんぶんぶん♪ んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん♪」

葉

「んゝ……れろれろ……ちゅ♪ わあ……♪ お姉ちゃんのお口ご奉仕凄ゝい♪ ベロをれゝつて出しながらの下品なひよつとこフェラ……♪」

葉

「パパゝ♪ 恥ずかしがり屋なお姉ちゃんのエッチなドスケベフェラいっぱい見てあげて？ その間、葉はパパの大きく膨れたお金玉をゝ……れゝろれろれろれろれろ♪」

楓

「んぶうゝ……じゆるるる♪ じゆるるるるゝゝゝ……♪ んゝ……ふあふあゝゝ……♪
んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん♪」

楓

「んゝ……じゆるじゆるじゆるじゆる……じゆるるるゝゝゝ♪ んゝ……喉のおぐう……もつど絞めつけてあげりゅ……♪ んぐゝゝ……♪
んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん♪」

栞

「ん……れろれろ……ん……うう……パパのお
金玉グツグツしてきたよ？ んへへ♪ もう重
すぎてベロの上に乗りきらないかも♪ んれ
ろろれろれろれろれろれろれろ」

栞

「ん……♪ パパ？ もっと精液作って？ お
姉ちゃんのお口ご奉仕でいっぱいザーメン作っ
て？ んれろろれろれろれろれろ」

楓

「ん、んぶう……！ じゅぶじゅぶじゅぶ
♪ んぶ、ん、ん……！ ぷはあ……！！
はあ、はあ……う……げほ！ げほげほ！
あう……えっぷっ……！」

楓

「う……ちよつと顎疲れちゃった……栞お願い……
……少し交代して？」

栞

「うん♪ えへへ♪ パパ？ 今度は栞のお下品
なご奉仕フェラ♪ よく見てて？」

栞

「ん……はあ……♪ パパのおちんぽいただ
きま……しゅんれ……んじゅる
じゅるじゅるじゅる……ん……じゅる♪
じゅるるる♪ じゅるるる……♪」

栞

「ん……♪ んぶんぶんぶん♪ んぶんぶん
ぶん♪ んぶんぶんぶん♪ んぶんぶん
ん♪」

楓

「ん……なら私はパパの金玉を……れろれろ
れろ……じゅるるる♪ ん……ちゅ♪ れろ
ろれろれろ♪ れろれろれろれろ♪」

葉

「んぶんぶんぶ♪ ん……♪ ふあふあの
我慢汁とお姉ひゃんの唾液が混じつれ……ん
♪ じゅるるる♪ ほっへもおいひい……♪」

葉

「ん♪ 葉も……♪ 頑張つれ喉締めてあげ
りゆね？ ん……ん」っ……んぶうう♪
んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶ♪」

楓

「んちゅ♪ れろれろ……ん……パパってば……
……ん……ちゅ♪ 金玉にもこんなにチン毛生
やしちやって……れろれろれろれろ
♪」

楓

「ん……これかりやは毎日私達がパパの金玉舐め
てあげるんだから……ん……ちゅ♪ きちん
とチン毛も剃ってよね？ れろれろれろ
♪」

葉

「んぶんぶんぶ♪ んぶんぶんぶう♪
ちゅ……じゅるるる……ん、ん！？ パパ……
……？ らめ……これ……んじゅる……じゅる
るる……！ ん……ぷはあ！ はあ、
はあ、はあ、はあ……♪」

栞

「ん、もう……♪ パパってば今イキそうになっ
たでしょ？ ダメだよ？ 最後は栞とお姉ちゃ
ん2人で搾り取ってあげる予定なんだから♪」

楓

「ん……じゅるるる……ん……ふはあ♪
はあ、はあ……ん♪ 栞ってばナイス寸止め
♪」

楓

「それじゃあ……パパ♪ メイド娘の本気フェラ
ご奉仕で♪ 沢山ぴゅっぴゅしてザーメン飲ま
せて♪」

栞

「それじゃあ……パパ♪ メイド娘の本気フェラ
ご奉仕で♪ 沢山ぴゅっぴゅしてザーメン飲ま
せてね♪」

楓

「あ……んむう♪ んぶう♪ んぶんぶ
んぶんぶんぶんぶんぶん♪ んぶんぶんぶん
ぶんぶんぶんぶん♪」

栞

「あ……んむう♪ んぶう♪ んぶんぶ
んぶんぶんぶんぶんぶん♪ んぶんぶんぶん
ぶんぶんぶんぶん♪」

楓

「んぶんぶんぶん♪ ん……パイっへ？
おひんぽぴゅっぴゅしへ……♪ んぶんぶんぶ
ん♪ んぶんぶんぶん♪」

栞

「んぶんぶんぶん♪ ふあふあ♪ いいよ
♪ 娘のおくひに〜……ん〜じゅるるる♪ ん
ぶ♪ 喉のおぐう〜……♪ いっふあいどぴゅ
ぴゅ〜ってしへ〜♪ ん〜♪ んぶんぶんぶん
ぶ♪」

楓

「んぶう♪ おひんぽイッヘ♪ イッヘ♪ イッ
ヘ♪ イッヘ♪ イッヘ♪」

栞

「んぶう♪ ふあふあイッヘ♪ イッヘ♪ イッ
ヘ♪ イッヘ♪ イッヘ♪」

楓

「ん〜♪ んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん
♪ んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん♪ ん
ぶんぶんぶんぶんぶんぶん♪ んぶん
ぶんぶんぶんぶんぶんぶう〜〜♪」

栞

「ん〜♪ んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん
♪ んぶんぶんぶんぶんぶんぶんぶん♪ ん
ぶんぶんぶんぶんぶんぶん♪ んぶん
ぶんぶんぶんぶんぶんぶう〜〜♪」

楓

「んっ……！ じゅるるるるるう〜〜
〜〜〜〜〜
〜！〜」

栞

「んっ……！ じゅるるるるるるう〜〜
〜〜〜〜〜
〜！〜」

楓

「んっ！？ んぶう~~~~~
~~~~~？？ んぐう~~~~~ んむっ~~~~~ ん  
~~~~~ん~~~~~！ んぐっ~~~~~く~~~~~く~~~~~  
~~~~~く~~~~~く~~~~~んむむ~~~~~ん、ん~~~~~  
~~~~~んぐっ~~~~~ぷはあ！ はあ、はあ、はあ、  
はあ~~~~~！」

栞

「んっ♪ んぶう~~~~~
♪♪ んぐう~~~~~！ んむっ~~~~~！ ん~~~~~ん
~~~~~！ んぐっ~~~~~く~~~~~く~~~~~く~~~~~  
~~~~~く~~~~~んむむ~~~~~ん、ん~~~~~ん  
ぐっ~~~~~ぷはあ♪ はあ、はあ、はあ、はあ
~~~~~♪」

楓

「うつぶ~~~~~！ げほ！ げほっ！ げほっ！  
う、あう~~~~~！ パパの精液くっさ~~~~~  
~~~~~い~~~~~！ うええ~~~~~！ げほげ  
ほっ！」

楓

「んも~~~~~！ 喉に直接出されたせいで~~~~~ん
げえ~~~~~！ げほっ！ げほっ！ あう~~~~~
~~~~~ちよつと息苦しいよ~~~~~」

栞

「ん~~~~~けほけほ~~~~~！ んへへ♪ でもでも♪  
初めてのお口ご奉仕でこんなに射精してくれ  
たんだもん♪ それだけ気持ちよかったんだよ  
ね♪ パ〜パ♪」



栞

「んゝ……くちゆくちゆくちゆくちゆく くちゆ  
くちゆくちゆくちゆく ん……♪ ぐく♪ ぐ  
く♪ ぐく♪ ぐく♪ んゝゝ……ぷはあ♪  
はあ、はあ……♪ はふうゝゝゝゝゝゝゝゝ」

楓

「ん♪ やっぱり来た……♪ パパのザーメン飲  
んだから……ん♪ おしっこ来ちゃう……♪  
ご奉仕おしっこ出ちゃう……♪」

栞

「パパゝ♪ このまま栞達のおしっこでおちんぽ  
綺麗にしちゃうね♪」

楓

「ん……そう♪ パパの汚いおちんぽ……おしっ  
こで洗い流してあげる……♪」

栞

「んあ……♪ パパゝ……♪ いっぱい感じて？  
娘のおしっこの香りも♪ おしっこの色も♪  
おしっこの勢いも♪ 娘のおしっこの全て、  
おちんぽで感じて？」

楓

「んあ……♪ あ……♪ あ、あゝ……♪  
はあ、はあ……♪ パパゝ……♪ イクよ？」

栞

「んあ……♪ あ……♪ あ、あゝ……♪  
はあ、はあ……♪ パパゝ……♪ イクね？」

楓

「ううゝ……イクう……♪ おしっこ出る……♪  
おしっこ出ちゃう……♪ ああ……♪ お  
しっこイクう……♪ イクイクイクイクイ  
クイクイクゝゝゝ……♪ おしっこイっ  
きゆうううううゝゝゝ……♪」

栞

「ううゝ……イクう……♪ おしっこ出る……♪  
おしっこ出ちゃう……♪ ああ……♪ お  
しっこイクう……♪ イクイクイクイクイ  
クイクイクゝゝゝ……♪ おしっこイっ  
きゆうううううゝゝゝ……♪」

楓

「んつつきゆうううううゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝ♪」

栞

「んつつきゆうううううゝゝゝゝゝゝゝ  
ゝゝゝ♪」

楓

「んあゝゝゝゝゝゝゝ やあゝゝゝゝゝ パパ凄いやおゝ  
……♪ これ……パパのおちんぽにおしっこし  
ちゃってる♪ パパのおちんぽにおしっこかけ  
ちゃってるゝゝ」

栞

「やあん♪ パパゝゝ 娘のおしっこでおちんぽ  
ビクビクしちゃってるよ？ ん……はあゝゝ  
やあ……♪ パパ可愛い♪ いいよ？ もっと  
感じて？ 栞のおしっこでおちんぽピクピクさ  
せてゝゝ」

楓

「ん……♪ ああ……♪ パパ……♪ パパ好き……♪ パパのおちんぽ好き……♪」

楓

「だからもつと……ん♪ マーキングしちゃう♪ 私のおしっこでジヨロジヨロマーキングしちゃうんだから♪」

栞

「えへへ♪ パパ……♪ それ……♪ おしっこジヨロジヨロ……♪ おしっこジヨロジヨロ……♪ はあ、はあ……♪ パパ……♪ パパ好き……♪ パパだ……♪ いい好き……♪」

楓

「はあ、はあ……♪ ん……♪ パパ……♪ パパ……♪ パパ……♪ パパ……♪ 好き……♪ 好き……♪ 好き……♪ 好き……♪ 好き……♪ 好き……♪ だ……♪ いい好き……♪」

栞

「はあ、はあ……♪ ん……♪ パパ……♪ パパ……♪ パパ……♪ パパ……♪ 好き……♪ 好き……♪ 好き……♪ 好き……♪ 好き……♪ 好き……♪ だ……♪ いい好き……♪」

楓

「ん……♪ はふ……♪ んへへ♪ 今日だけで何回おしっこお漏らししたんだろ……♪ パパに見てもらうのも何だか慣れてきちゃった……♪」

栞

「ん♪ 病気の事とかどうでもよくなっちゃうくらい……♪ 栞、パパにご奉仕するの大好き……♪」

---

楓

「……でも流石にパパとキスしたりおちんぽチュッチュする度にお漏らししちゃうのはどうにかしたいかな……」

楓

「だって……そのう……もし病気が治っても……これからもするんでしょ……？　パパとエッチな事……♪」

栞

「うん♪　お姉ちゃんの言う通り、発情した勢いで告白しちゃったけど……もうパパの事大好きって、愛してるって伝えちゃったし、今更普通の親子に戻るなんてできっこないもん♪」

栞

「ね？　パパも……もう栞達にご奉仕して貰えないだなんて、そんなの嫌だもんね？」

楓

「……うう……それならやっぱりもっとザーメン飲んで、チンカスも食べて、いっぱいいっぱいおしっこして病原菌を出しちゃわないと！」

楓

「毎日おしっこ漏らしてたら、部屋中おしっこ臭くて大変だもん！」

栞

「えへへ♪　ならお口でなんかよりも……こゝこゝ　♪　パパのおちんぽで直接栞の中にザーメン注いで貰いたいなゝって♪」

栞

「もっとエッチに言うところ……」

---

---

「葉のトロトロおまんこに直接おちんぽミルク  
ぴゅっぴゅして欲しいな」

「ん……私も……」

「パパと娘で何て本当はダメだけど……もう我慢  
できないの……」  
「パパの唾液とか精液とか……  
……パパの味いっぱい覚えちゃって……もうおま  
んこトロトロなの……」

「だからさ……？　パパ……　お願い……」

「だからね……？　パパ……　お願い……  
」

「パパの目の前でおしっこ漏らしちゃうダメなメ  
イド娘に……」

「パパの事が大好きすぎておまんこトロトロにし  
ちゃうエッチなメイド娘に……」

「パパの大きくて逞しいチンカスおちんぽ様で……  
……お仕置きして？」

「パパの大きくて逞しいチンカスおちんぽ様で……  
……お仕置きして？」

---



|   |                                                                      |
|---|----------------------------------------------------------------------|
|   | トラック06                                                               |
| 葉 | 「パパ……？ 葉より先にお姉ちゃんとEしてあげて？」                                           |
| 楓 | 「ふえ……！？ し、葉……？ いいの……？」                                               |
| 葉 | 「うん♪ お姉ちゃんがずっと、ず～ず～ずっとパパに恋してた事も、パパの為に家事とか頑張ってるの知ってるもん♪」              |
| 楓 | 「う……葉っては何恥ずかしい事言ってるの……！ って、パパも……う～……ダメ……そんな目で見ないで……人して私を恥ずかしめないで……！」 |
| 葉 | 「ね？ お姉ちゃん♪ 今日は思う存分愛してもらおう♪ パパにいっぱい、おちんぽでちゅっちゅしてもらおう♪」                |
| 楓 | 「ん……う……うん……パパ……♪ お願い……♪ 来て……？」                                       |
| 楓 | 「パパのおちんぽで……♪ ご主人様のおちんぽで♪ メイド娘のおまんこ、いっぱいパンパンして？」                      |
| 楓 | 「パパのおちんぽで……パパの包茎おちんぽ様で……♪ 楓のスケベな欲しがりおまんこ、お仕置きして……♪」                  |

楓

「ん……♪ あ……♪ パパ……♪ うん♪ 大丈夫だから……私の処女、パパにあげたいの……♪ パパに貰って欲しいの……♪ だから……♪ ん♪」

楓

「あ……♪ パパ……♪ 来て……♪ 奥まで一気に……♪ ん♪ ん♪ んっ……………きゆううううううう……………♪」

楓

「んあっ！ はあ、はあ、はあ、はあ……♪ え、えへへ♪ パパの、全部入っちゃった……♪」

楓

「うん……♪ 痛くないよ……？ むしろ、やつとパパに初めてをあげられたって思うと……えへへ♪ すっごく嬉しい……♪」

楓

「ん……パパ……♪ ん……ちゅ♪ れろ……ちゅぶ♪ ちゅ……ん……ちゅ♪ ん♪ パパ好き……♪ パパ大好き……♪」

楓

「ん……パパ……♪ お願い……♪ このままいっぱいおまんこお犯して？ 私のおまんこにパパの形、いっぱい覚え込ませて？」

楓

「んあ♪ あ♪ あ♪ あ♪ あ♪ あ♪ あ♪ あ♪ あ……♪ パパ……♪ パパ……♪ ん♪ あ♪ あ♪ あう……♪」

楓

「はあ、はあ……♪ ん♪ ん……♪ やあ……  
♪ パパのおちんぽ上下に……動いて……ん♪  
♪ おっ♪ やあ♪ これ、ダメ……♪」

楓

「ん♪ パパあ……♪ 聴かないで？ ん♪ 私  
の感じてる声……恥ずかしいから……ん♪ あ  
……♪ あ……♪ あ……♪ あう……♪」

葉

「わあ……♪ パパとエッチしてるお姉ちゃん可  
愛いな♪」

葉

「ん♪ はあ、はあ……♪ あう♪ こんな  
可愛い声聞かされたら葉……もう我慢できない  
よ……♪」

葉

「はあ、ん♪ やあ……♪ パパ……♪ ん♪  
……ちゅ♪」

葉

「えへへ♪ 葉、パパとお姉ちゃんのセックスを  
見てね？ おまんこ発情しちゃったの♪ おま  
んこくちゅくちゅ止まらないの♪」

葉

「ん……だっただっ……♪ パパのおちん  
ぽ汁とお姉ちゃんのマン汁が臭すぎるの悪いん  
だよ？」

葉

「盛りのついたオスとメスが交尾する香り……  
♪ すう……♪ はあ……♪  
♪」

栞

「んもうダメだよ〜♪ 栞もお姉ちゃんみたいに  
メスになっちゃう……♪ パパの事が大好きな  
メスになっちゃうよ〜♪」

栞

「う〜〜……もう我慢できない……♪ パパ〜…  
…♪ ん〜……ちゅ♪ ちゅ、ちゅ♪」

栞

「えへへ♪ パパ〜♪ お姉ちゃんとセックスし  
てる間、れ〜〜ろれろれろ〜♪ ん〜……ちゅ♪  
栞はパパのお耳れろれろご奉仕しちゃうね  
♪」

栞

「パパ〜……♪ 耳カスいただきま〜〜す♪ ん  
れ〜〜ろれろれろれろ……じゆるるる  
♪ ん〜……れ〜〜ろれろれろれろ〜♪」

楓

「んあ……♪ あ♪ あ♪ あ♪ あう〜……♪  
パパにしてもらってばかりじゃ……ん♪ わ  
ざわざメイドさんになった意味がないよね…  
…?」

楓

「ん♪ それなら……♪ はあ、はあ……♪ ん  
♪ パパ……♪ こういうのはどう……?」

楓

「そろれ♪ おまんこきゅっきゅ♪ おまんこ  
きゅっきゅ〜……って、きやあ!?! やっ…  
…! ちよ、パパってばいきなりおちんぽ大き  
くしすぎ……って、んお……♪ お……♪ お  
……♪ お……♪ お〜……♪」

楓

「んぐっ……やあ……ぱ、パパ……♪ んお……♪  
ちよ、やつ♪ 激し……ん……！！ん  
お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪  
お♪、お♪……！！」

楓

「んあ♪ パパ……♪ ん……あぶっ♪  
れろれろ……ちゆ♪ んちゆ♪ ん……  
ちゆ♪ はあ、はあ……♪」

楓

「ん♪ えへへ♪ パパってば、おまんこキュキ  
ュってされるの好きなんだ……♪ んあ♪ あ  
……え、えへへ♪ 嬉しい……♪ んう♪ ま  
たパパの知らない一面知っちゃった♪」

楓

「ん♪ はあ、はあ……♪ いいよ？ ん♪  
もっとしてあげる♪ もっともっ……大好き  
なパパの為にまんこご奉仕してあげる……  
♪」

楓

「それ♪ おまんこきゅっきゅ♪ おまんこ  
きゅっきゅ♪ おまんこきゅっきゅ♪ おまん  
こきゅっきゅ……♪ ん、やあん♪ ん  
お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お……  
……♪」

楓

「これすこ……ん、お♪、お、お……♪  
気持ちよしゆぎて変な声出りゆ……♪ 下品  
な声出りゆ……♪ ん、お……♪、お♪、お  
♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お  
お……♪」

栞

「んれ……ろれろれろ……じゆるるる……ん  
……ちゆ♪ えへへ♪ パパ見えてる？ パパ  
のおつきいおちんぽが……お姉ちゃんのおま  
んこ肉ぐちゆぐちゆかき回してるよ……？」

栞

「ほら今も……お姉ちゃんの綺麗なビラビラを  
かき分けて……ぐちゆぐちゆぐちゆぐちゆ♪  
ぐちゆぐちゆぐちゆぐちゆ……って♪」

栞

「って、あ♪ 今お姉ちゃんチョロってお漏らし  
したね……♪ どう？ 嬉しい？ お姉ちゃんのお  
まんこをぐちゆぐちゆ出来て嬉しい？」

栞

「ん……ちゆ♪ うん♪ いいんだよ？ パパ  
がどれだけお姉ちゃんを犯しても♪ どれだけ  
お姉ちゃんを泣かせても♪ 皆許してくれるも  
ん♪」

栞

「だって……パパはお姉ちゃんを治療してるだけ  
だもんね♪ だからお願い♪ お姉ちゃんを思  
いっきりイカせてあげて？」

栞

「これから一生パパのおちんぽ無しじゃ生きられないくらい思いつきり♪ おしっこプシャッ  
ッってお漏らししちゃうくらい気持ちよくイカ  
せてあげて？ んれッッろれろれろれろ  
♪」

楓

「ん、お♪、お♪、お♪、お♪、おッッッ  
……♪ パパッ……♪ これほんとダメ……♪  
ん、お♪、お♪ おまんこで直接チンカス食  
べちゃったら……こんなのイグ……♪ パパの  
おちんぽ様に負けちゃうう……♪」

楓

「ん、おッッ♪ そんなのダメ……♪ 今日は私  
がメイドなのにい……パパにご奉仕するのにい  
……♪ ん、お♪、お♪、お♪、お♪、お  
ッ……♪ ご主人様に楽しんでもらわなきゃ  
なのにい……♪」

楓

「ん、お、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪  
、お♪、お♪、お♪、おッ……♪ ダメ♪  
イグう……♪ このままイグう……♪ メイ  
ド娘の雑魚まんこイっっちゃうう……♪」

楓

「んあ……♪ やあやあ……♪ もっと欲しい  
のお……♪ パパのおちんぽもっと欲しいのお  
……♪ んッ……♪ でもダメ……♪ おまん  
こイグう……♪ おまんこイっっちゃうよお……  
♪」





楓

「パパのチンカスでイグう……♪ パパのチンカ  
スおちんぽでイっぐう……♪」

楓

「ん、お……♪ 雑魚まんこイグ♪ 雑魚ま  
んこイグう♪」

楓

「イグ♪ イグ♪ イグ♪ イグ♪ イグ♪ イ  
グ♪ イグ♪ イグ♪」

楓

「イクイクイクイクイクイクイクイク イクイ  
クイクイクイクイクイクイクう……♪」

楓

「おまんこイっきゅううううううううう……  
……♪」

楓

「んっっぐうううううううううう……  
……♪」

楓

「お♪ 、おお……♪ んっくう……  
……♪ ンお♪ 、お、お……♪  
潮吹きでりゅう……♪ おまんこ  
からいっぱい……♪ ン、お♪ 、お♪ 、お  
……♪」

楓

「んあ♪ はあ、はあ、ん……♪ お……  
♪ や……♪ パパ……♪ 出して……♪  
楓のおまんこにらして……♪ おちんぽみ  
りゆくいっぱいぴゅっぴゅしへ……♪」

楓

「んお♪ お♪ おう……♪ んへへ……♪ パ  
パ……♪ ん……それ♪ おちんぽぴゅっ  
ぴゅ♪ おちんぽぴゅっぴゅ♪ おちんぽ  
ぴゅっぴゅ♪ おちんぽぴゅぴゅぴゅ……  
……♪」

楓

「ん……はあ、はあ……♪ パパ……♪  
きしゅ……♪ ん……ちゅ♪ れろ  
れる……ん……ちゅ♪ ちゅ、ちゅ♪」

楓

「えへへ……♪ パパしゅき……♪ パパらしい  
しゅき……♪ ん……ちゅ♪ れろれる……  
……ちゅ♪ ん……ちゅ♪ れろ……ちゅ、  
ちゅ♪」

葉

「れろれる……ん……ちゅ♪ わあ♪ お姉  
ちゃんってば、子供みたいにパパに甘えちゃっ  
て可愛い♪」

葉

「これも全部パパのおかげだね♪ パパ♪ お疲  
れ様♪ ん……ちゅ♪ ちゅ、ちゅ♪」

楓

「ん……パパ……♪ れろれる……ちゅ♪  
ん……ちゅ♪ えへ……♪ うん♪ 平気  
♪ 何だか発情も落ち着いてきて……ん♪  
やっぱりおまんこでパパを受け入れたのが大き  
いみたい……」

---

楓

「んへへ……♪ まあ気持ち的にも、パパと二つになれて、パパに愛してもらえて……そのう……うん♪ 嬉しかったから……ん……パパ大好き……ん……ちゅ♪」

楓

「えへへ♪ このままずっとパパのおちんぽ入っていたいけど……ん♪ 葉が待ち遠しそうにおまんこくちゅくちゅしてるから……ね？ ほら葉♪ こ……っち♪」

葉

「わわっ！？ お、お姉ちゃん……！？」

楓

「ほら葉も♪ パパのおちんぽオネダリして？」

葉

「う……あ……♪ えへへ♪ パパ……？ お姉ちゃんにしたみたいに葉の事も……葉のおまんこも……いっぱい愛して欲しいな♪ えへ……♪」

---

|   |                                                                                  |
|---|----------------------------------------------------------------------------------|
|   | トラック07                                                                           |
| 葉 | 「ん……パパ……来て？ お姉ちゃんとのセック<br>スでドロドロになったおちんぽ……葉の中で受<br>け止めたいの……♪」                    |
| 葉 | 「ん♪ ここ♪ パパの可愛い娘のおまんこだよ<br>♪ ほくら♪ ビラビラを左右に開いて……<br>おまんこクパ……♪」                     |
| 葉 | 「つて、あう……パパ……おまんこ見すぎだ<br>よ……♪ ん♪ やあ……♪ 嬉しくておま<br>んこヒクヒク止まらないの……♪」                 |
| 葉 | 「うん♪ そうだよ？ 大好きなパパの事を想っ<br>て毎日オナニーして育ててきた、葉のトロトロ<br>おまんこ♪」                        |
| 葉 | 「おまんこの毛も綺麗に剃って、黒ずんだりしな<br>いように綺麗にお手入れしてきた……パパだけ<br>の葉おまんこ♪」                      |
| 葉 | 「ね？ パパお願い……♪ 葉を抱いて……？<br>葉の初めて……葉の大切な処女おまんこ……<br>貰って欲しいの♪」                       |
| 葉 | 「ん……♪ あ……♪ パパ……♪ うん♪ そ<br>のまま……ん♪ そう……♪ いいよ……♪<br>パパがおまんこに入ってくるの……気持ちいい<br>よ……♪」 |

葉

「ん……葉も……パパが入って来れるように……  
ん♪ 包茎チンポの先っぽに、まん汁ヌリヌリ  
♪ まん汁ヌリヌリ……♪」

葉

「ん♪ あ……♪ チンカスとマンカスがキスし  
ちやって……ひゃん♪ やあ……♪ パパ……  
……♪ あん♪ チンカス来て……♪ おまんこに  
チンカス食べさせて……♪」

葉

「あう……♪ パパ……♪ パパ……♪ パパ……  
♪ パパ……♪ ん……♪ あ……♪ 来る  
♪ パパのチンカスちんぽ……♪ んっ……っ  
きゅううううう……♪」

葉

「ん、お♪、お♪、お……♪」

葉

「お……♪ え、えへへ……♪ パパのチンカ  
スおちんぽ……全部入っちゃった♪」

葉

「んへへ……♪ 嬉しいな♪嬉しいな♪ こ  
れで葉もパパの恋人おまんこだ……♪ えへへ  
♪ パパ好き……♪ パパだ……い好き……♪ ん  
……ちゅ♪ ちゅ、ちゅ♪」

葉

「んれ……ろれろ……ちゅ♪ ん……ちゅ  
♪ ちゅ……ちゅ♪ えへへ♪ パパってば優  
しい♪ でも大丈夫だから……うん♪ いい  
よ？ パパのしたいようにして……？」

葉

葉

葉

楓

楓

葉

栞

「ん♪ えへへ……♪ それなら……ん♪ お  
姉ちゃんのおまんこと栞のおまんこ……♪  
どっちが気持ちいい？ ん♪ あ♪ あ♪  
あ♪ ああん♪」

栞

「ん、って、やん♪ パパごめんね？ 今のは…  
…ん♪ ちよつと意地悪だったね♪ ん♪ お  
詫びに……はあ、はあ……ん♪ おまんこで  
いっぱいご奉仕してあげる♪」

栞

「ん……はあ、はあ……♪ えへへ♪ パパ…  
…♪ いつくよく……？ ん……♪ それ♪  
おまんこきゅつきゅ♪ おまんこきゅつきゅ♪  
おまんこきゅつきゅ♪ おまんこきゅつきゅ  
……♪」

栞

「ん、お♪、お♪、お……♪ んへへ……  
♪ 分かるかな？ パパのおちんぼの先、可愛  
いおちんぼの皮♪ おまんこの中でムキムキし  
ちやってるんだよう？」

栞

「それぞれ♪ おまんこきゅつきゅ♪ おまんこ  
きゅつきゅ♪ パパのチン皮を、おまんこのヒ  
ダヒダで……チン皮ムキムキ♪ チン皮ムキ  
ムキ……♪」

栞

「つて、ん、お……♪、お♪、お♪、お♪  
お……♪ やあ……おまんこでチン皮剥くの  
気持ち良すぎて……ん、お……♪ へ、変  
な声出りゆ……♪ 下品な声出ちゃうよ……  
♪」

栞

「それに♪ チン皮に包まれてないパパの生おち  
んぽ……ん♪ カリがおまんこのお肉ホジホジ  
して……お、おん♪、お♪、お♪、お♪  
お♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お……♪」

栞

「やあ……♪ パパ……♪ もっと栞のおまんこ  
ホジホジして？ 栞のおまんこにチンカス擦り  
付けて？ 栞のおまんこチンカス臭くして……  
♪」

栞

「ん、お……♪、お♪、お♪、お♪、お♪、お♪  
お♪、お♪、お♪、お……♪……  
♪」

楓

「れ……ろれろれろ……ちゅ♪ ん……栞の喘ぎ  
声凄いいね……いつもは清楚で可愛い妹なの  
に……パパとエッチするとあんなに下品で汚い  
声で喘いじゃうんだ……」

楓

「ん……でも仕方ないよね♪ 大好きなパパのチ  
ンカスで子宮ホジホジされたら下品に喘いじゃ  
うに決まってるし……♪」



楓

「んれ〜〜……ろれろれろ……じゆるる……ん〜  
……ちゆ♪ だから……ちゆ♪ 葉の事……  
もつと下品に犯して？ 葉のおまんこ……パパ  
の形に調教してあげて？ パパだけの都合のい  
い恋人メイドにしてあげて？」

葉

「やあ〜……♪ ん、お♪、お♪、お♪、お♪  
、お〜〜……♪ パパ〜……♪ ん、お〜〜  
〜〜〜♪ おまんこ気持ちいいよ〜♪ おまん  
こキュンキュン止まらないよ〜♪」

葉

「おまんこがチンカス食べる度に腰が震えちゃっ  
て……♪ ん、お♪、お♪、お〜〜♪ おま  
んこ痙攣止まんにやい……♪ 下品な声止まん  
ないよ〜……♪ ん、お〜〜〜〜〜♪」

葉

「ん〜〜♪ はあ、はあ……♪ うん♪ なるう  
……♪ 葉い……♪ パパのチンカスお嫁さん  
になるう……♪ 毎日チンカスお掃除するだけ  
のチンカス妻になるの〜〜……♪」

葉

「ん、お♪、お♪、お♪、お♪、お〜〜……  
♪ チンカスう……♪ チンカス♪ チンカ  
スう〜〜〜……♪」

葉

「ん、お〜〜……♪ お♪ お♪ お♪ お♪  
お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪  
お♪ お♪ お♪ お♪ お♪」

葉

「お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪  
お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪  
お♪ お♪」

葉

「お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪  
お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪  
お♪ お♪」

葉

「んお♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ パパ♪  
♪♪♪♪ もうイグ……♪ もうイっちゃう  
♪ 葉のチンカスおまんこイっちゃうよお♪  
♪♪」

葉

「んやあ……♪ パパと一緒に♪ パパと一緒に  
にイグの♪ パパと一緒ににおまんこイグのお…  
…♪」

葉

「ん♪お♪……♪ お♪ お♪ お♪ お♪  
お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪  
お♪ お♪ お♪ お♪」

葉

「お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪  
お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪ お♪  
お♪ お♪」

葉

「ん♪お♪……♪ パパイグう♪ おまんこイ  
グう♪ 葉の雑魚まんこイぐう♪  
♪」



栞

「ん……はあ、はあ……♪ ん……ちゅ♪ れ  
ろれろ……ちゅ♪ ん……ちゅ♪ ふあふあ  
……♪ ちゅ♪ れろれろ……ん……ちゅ  
♪ えへへ♪ キスしながら中出しされるの  
しゅき……♪」

栞

「お口もおまんこもパパと繋がれて栞、幸せ……  
……♪ ん……ちゅ♪ れろれろ……ちゅ、  
ちゅ♪」

楓

「んれ……ろれろれろ……じゅるる……ん……  
……ちゅ♪ ん……パパ……♪ 栞にも中出しし  
てくれてありがとう……♪」

楓

「私も栞も……ん……ちゅ♪ これでパパの女に  
されちゃった♪ ちゃんと最後まで責任取って  
くれないと許さないんだから♪ ん……ちゅ  
♪ ちゅ、ちゅ♪」

栞

「えへへ……♪ 栞も栞も……♪ ん……ちゅ♪」

栞

「パパ……♪ 栞のおまんこにも精液ぴゅっぴゅし  
てくれてありがとうね♪ ん……ちゅ♪  
ちゅ、ちゅ♪」

楓

「へ……？ 発情……？ って、あ……そうだっ  
た……パパのチンカスザーメン子宮で受け止め  
てから何だか落ち着いてきたかも」

栞

「栞も今は平気だよ♪ やっぱりお口でこっくんするよりおまんこに直接ぴゅっぴゅして貰った方が効果あるんだね♪」

楓

「でもさ……このメイド症候群って定期的にこ奉仕欲が暴走して発情しちゃうみたいだし、きつとこの後もまたすぐ発情しちゃうと思うから……」

栞

「パパ？ まだまだ栞達のおまんこにおちんぽぴゅっぴゅして欲しいな♪」

楓

「えっと……パパが好きなら……おまんこだけじゃなくて……こっちも……♪ お尻の穴でもシてくれていいよ……？」

楓

「……うん♪ 座薬みたいに……お尻の穴からぴゅぴゅって……精液注いでほしい……チンカスでアナル汚してほしい……♪」

栞

「パパがしたいなら何でもしてあげるよ？ またお口でくちゅくちゅしてもいいし、おまんこきゅっきゅしてもいいし、お尻の穴でおちんぽ包んであげてもいいよ♪」

楓

「だから……？ パパ……♪ これから毎日、メイド娘のご奉仕エッチ♪ 楽しんでよね♪ん……ちゅ♪」

「だからね……？ パパ……♪ これから毎  
日、メイド娘のご奉仕エッチ♪ 楽しんでね♪  
ん……ちゅ♪」

|   |                                                                           |
|---|---------------------------------------------------------------------------|
|   | トラック08                                                                    |
| 楓 | 「パパってさ……女の子の口の中、すっごく好きだよね？」                                               |
| 栞 | 「メイド症候群の治療の為に毎日ご奉仕してるけど、キスとかフェラとか耳舐めとか、おまんこよりもお口でご奉仕してる回数の方が多いもんね♪」       |
| 楓 | 「前々から思ってたけど、やっぱりパパって変態さんなの？ お口フェチさんなの？」                                   |
| 栞 | 「えへへ♪ 別にパパが変態さんでも構わないよ？ むしろもっと栞のお口で楽しんで欲しいな♪」                             |
| 楓 | 「ん……別に私も嫌じゃないし……むしろパパの為なら何でもしてあげたいし……♪ ん……♪ いいよ？ 今日はとことんまでお口でご奉仕してあげる……♪」 |
| 楓 | 「私達のご奉仕してる間は好きにオナニーしてくれていいから♪ いっぱいチンカスと我慢汁くちゅくちゅして気持ちよくなってるね？」            |
| 栞 | 「えへへ♪ それじゃあまずは栞から……♪ パ……♪ 見て見て？ 栞のおくちゅあ……♪」                               |

「パパ……私……あ……」

「えへへ♪ お口を開けると……毎日パパのおちんぽをしゃぶってる菜の臭い唾液が糸を引いて……パパのおちんぽ啜えたいよぅってオネダリしちゃってるんだよぅ？」

「パ・パ……♪ ん……くちゆくちゆくちゆく  
ちゅ♪ くちゆくちゆくちゆくちゅ♪ ん……  
…♪ ふあふあのらいしゆきな娘の唾液♪  
いっふあい嗅いれ……?」

[illegible]

「やあん♪ パパ♪ 葉も葉も♪ 口の中に  
いっぱい唾液を溜めて♪……ん♪……くちゆく  
ちゆくちゆくちゆく くちゆくちゆくちゆく  
ちゅ……♪」

「ん……はああ~~~~~  
 ♪ はあ~~~~~ ♪ はあ~~~~~  
 はああ~~~~~

「パパー♪ もっとお口の中見て？ 私の唾液と喉チンコいっぱい見て興奮して？」



楓

「すうすうすう……はああすうすうすう  
すう はあすうすうすう はあすうすう  
はああすうすうすうすうすう」

栞

「栞も……すうすう……はあすう  
すうすうすうすう はあすうすう  
すう はあすうすうすうすう はあ  
すうすうすうすうすう」

楓

「ん……今度は……」

栞

「お姉ちゃんと一緒に……」

楓

「ん……くちゆくちゆくちゆくちゆ くちゆ  
くちゆくちゆくちゆ ん……はああ  
すうすうすうすう はあすう  
すう はあすうすうすう」

栞

「ん……くちゆくちゆくちゆくちゆ くちゆ  
くちゆくちゆくちゆ ん……はああ  
すうすうすうすう はあすう  
すう はあすうすうすう」

楓

「すうすうすう……はああすう  
すうすうすうすうすう  
すうすうすうすう」

栞

「すうすうすう……はああ  
すうすうすうすう  
すうすうすう」

楓

「んへへ♪ パパ……♪ そろそろ直接唾液  
飲みたくなってきたんじゃない？」

葉

「葉も♪ さっきからパパの唾液飲みたくて飲  
みたくて喉がからっからなの♪」

楓

「ほら♪ パパ？ 餌を待つひな鳥みたいにな  
……おくち♪ あっくんって開けて？」

葉

「って、やあっくん♪ パパってば可愛いな♪ 可  
愛いな♪」

楓

「ん……そのまま、そのまま……♪」

楓

「ん……くちゅくちゅくちゅくちゅ♪ くちゅ  
くちゅくちゅくちゅ♪ ん……ふあふあ？  
娘のら液……召し上げれ……んれ……  
……♪ じゅる♪ じゅるるる♪ じゅるる  
るるるる……♪」

葉

「ん……くちゅくちゅくちゅくちゅ♪ くちゅ  
くちゅくちゅくちゅ♪ ん……ふあふあ？  
娘のら液……召し上げれ……んれ……  
……♪ じゅる♪ じゅるるる♪ じゅるる  
るるるる……♪」

楓

「ん♪ じゅるるるる♪ じゅるるるるるる  
る……♪ ん……パパ……♪ もっと唾  
液飲んで？ んれ……ろれろれろ♪ じゅる  
るるるるる……♪」

栞

「んっっ♪ パパ見てみてっ？ んっ……くちゅくちゅくちゅくちゅくちゅ♪ んっ……れっっっっっ  
っっっ♪ んっ……ちゅ♪」

栞

「えへへ♪ パパのお口にしろっい唾液の塊落としちゃったっ♪ どうかかな？ こういう変態的なご奉仕も喜んでくれてるかな？ んっ……ちゅ♪ じゅるるる♪ じゅるるるるっっっ  
♪」

楓

「んっ……パパ♪ パパ♪ パパ♪ パパっ……  
♪ んっ……ちゅ♪ じゅるじゅるじゅるじゅるる♪ ん、んっ……ちゅ♪ ちゅ、ちゅ♪」

栞

「んっ……パパ♪ パパ♪ パパ♪ パパっ……  
♪ んっ……ちゅ♪ じゅるじゅるじゅるじゅるる♪ ん、んっ……ちゅ♪ ちゅ、ちゅ♪」

楓

「んっ……ぶはあ♪ はあ、はあ……あはは♪  
パパってばっ……♪ うん♪ 分かってる♪ 私達がパパの唾液をこっくんする音、耳元で聴きたいんだよね？」

栞

「栞もパパに聴いてほしい……♪ 大好きなパパの唾液をこっくんするエッチな音……♪ ごくごくって喉を鳴らしながら愛しいパパと一つになる音……♪ いっぱい聴いて楽しんでね♪」

楓

「んっ……パパっ……♪ いくよっ……?」



---

栞

「すうすうすう……はああすうすうすう  
♪ はあすうすうすう♪ はあすうすう  
すうすう♪ はああすうすうすうすう  
すうすうすう♪」

楓

「ん？ なにに パパってばもって欲し  
いの？」

栞

「えへへ♪ いいよ♪ パパの娘として、パパの  
メイドとして♪ 喜んでお口ご奉仕するね♪」

楓

「ん……すうすう……はああすうすう  
すうすう♪ はあすうすうすう♪ はあ  
すうすう♪ はああすうすう  
すうすうすう♪」

栞

「ん……すうすう……はああすうすう  
すうすう♪ はあすうすうすう♪ はあ  
すうすう♪ はああすうすう  
すうすうすう♪」

楓

「ん……ちゅ♪ えへへ♪ パパ♪ どう？  
パパがして欲しかった唾液塗れの口臭攻め♪  
気持ちいい？」

栞

「ん……スん♪ スンスン……♪ やん♪  
パパのお耳、栞の口臭ですっごく臭くなってる  
よ？」

---





葉

「んわゝ♪ こっちのお耳も、まるで3日放置したチンカスみたいな臭さだよ？ んゝ……すうゝゝゝゝ……はあゝゝゝゝゝゝゝゝ」

葉

「わゝゝ♪ パパのお耳くっさゝゝゝゝい♪ パの耳カスくっさゝゝゝゝゝゝゝゝい♪ でもそんな耳カスもだゝゝい好きゝ♪ んれゝゝろれろれろれろれろ」

楓

「んちゅ♪ じゆるじゆる……ん♪ パパの臭い耳カスう……♪ んれゝゝろれろれろ♪ じゆる♪ じゆるるるゝ♪」

葉

「んゝ……ちゅ♪ れろれろ……ん♪ パパには葉のお口が無いと生きていけない体になってもらうんだからね♪」

葉

「うん♪ 他の女の人なんかじゃ絶対に満足できない、葉達メイド娘にしか発情できないエッチな体にしてあげる……♪ んれゝゝろれろれろ♪ じゆるるる♪」

楓

「ん♪ ワンちゃんがおしっこするみたいに、パパのお耳を唾液でマーキング……♪ んゝ……くちゅくちゅくちゅくちゅ♪ んれゝゝゝろれろれろれろれろれろれろれろれろれろれろれろれろ」



栞

「ちゅ♪　じゅるじゅる……ん……ふあふあ……  
……♪　栞も……唾液でパパのお耳にマーキング……ん……くちゅくちゅくちゅくちゅ……♪　じゅるる♪　んれ……ろれろれろれろれろれろ」

楓

「ん……じゅるじゅるじゅるじゅる♪　ん♪　えへへ♪　そろそろラストパートいくよ……？」

栞

「れろれろれろ……じゅるる♪　ん♪　パパ？　メイド娘の本気ご奉仕♪　いっぱい感じて？」

楓

「ん……す……んれ……ろれろれろれろれろれろ……♪」

栞

「ん……す……んれ……ろれろれろれろれろれろ……♪」

楓

「れろれろれろ……じゅるるる♪　ん……パパ？　もうイキそう？　包茎おちんぼシコシコしてイっちゃいそう？　んれろれろれろれろれろ」

栞

「じゅるじゅるじゅるじゅる……ん♪　イっへ？　パパの包茎チンカスおちんぼ♪　思いつきりイッて？　娘の唾液でイっちゃって？」

楓

「イッて？　イッて？　イッて？　イッて？」



楓

葉

楓

葉

楓

葉

楓

---

葉

---

「パ  
パ〜……♪  
これから葉の事、よろしくね  
ん〜……ちゅ♪  
」